

瀬川紀雄 ネット詩集

玄関と僕、
自室と我



風詩社

目次

習作「馬」五編……………3

一 シュツペルヴィルの馬―

二 リンゲルナッツの廢馬―

三 マヌエル・カブラルの哀馬―

四 ぼくの馬

五 あなたの馬になれなかったぼく

宇宙と己／地球と私

△照明……………11

宇宙の空……………13

宇宙遺伝子……………15

熱の輪廻……………17

△四大の転位……………19

不安定な内なる四大……………21

世界は傾いて動いている……………23

直線回帰……………25

反重力……………27

(目次の項目をクリックすると本文の項目へジャンプ。その逆も可)

海の時間……………29

在り処……………31

街と自身／玄関と僕

△白い満月……………33

ねふた……………35

哀歌―抵抗のための……………37

世界の果てなのに……………39

連理……………41

夜行バスを降りて……………43

雪のトリオ・ソナタ……………45

非在……………47

△残光……………49

シシュポス……………53

停止した時間……………55

シエカよ……………57

退行……………59

同じ時間に……………61

翅雪	63
消えゆく雪	65
命の糸遊	67
自室と我／芸術と自分／追憶と俺	
△休日の土曜日	69
形而内	71
万年浪人生	73
溜め息	75
ある肖像	77
反復の死	79
カリキュラム	81
嘆きの歌	83
彷徨	85
放射と照射	87
△即興詩 1、即興詩 2	89
短詩 5 題	92
諦めて	97

雲上の人びと	99
色子	101
位相空間	
— 葛西克雄絵画展より —	103
夢 — 腐れ卵	105
館の絵	107
無音	109
異空間の輝き	111
疎音の出会い	113
△時のふくらみ	115
これからのとき	117
隧道	119
四態	121
小さな流離	123
黒ずむ茜	125
初出概要	126
あとがき	127

習作「馬」五編

習作一 ― シュツペルヴィルの馬 ―

うしろをふり向いたその少年は
今まで誰も見たことのないものを見た
それから 校庭の木かげで
運動会の応援をつづけた

それはひとりの少女でもなく
木の葉の茂みをざわめかせた
風の記憶ですらなかった

それは太古にはぐれた一匹の小猿が
突然うしろをふり向いた
ちやうどその時見たものだった

それは誰も再び見ることのないものだった
地球が山も川も海も持たず
宇宙にもどる時まで

習作二 — リンゲルナッツの廃馬 —

一匹の馬があつた

馬に偽装した人間かもしれない

老いぼれ 皮が剥がれ 淘汰された

それでもなお重荷を牽き 血の汗を流した

鞭が脆弱な骨を打ち 馬はついに斃れた

その屍骸から 天馬が飛び出した

極寒の氷河と灼熱の砂漠が幾度も繰り返し

生きものが全滅しては かすかに残った命が
やがて進化し 多様化した頃
老いた天馬が落ちてきた

馬でないような馬だった
馬に偽装した人間かもしれない
誰のためにか 地上で活発に働き
やがて 老いた馬となった
そして 人知れず斃死した
その屍骸から 天馬が飛び出した

習作三 — マヌエル・カブラルの哀馬 —

わたしの肉体がそこにあった
いま 誰も使用していない

誰かがいつだったか貸してくれたのだ
汚れなき美しい裸体だった

いつからか その肉体を苦しめ

そして ある男を突っ込んだ

そのような素材で可哀相な馬となり

腹をすかせて地平線を蹴ってばかり

嘶いては森を吐き出してばかりだった

貰ったときのようにして返したいのだが

男がわたし自身であることに気づくと

森も地平線も消え そして 馬も消えた

肉体をくれたのだからへ空間だけ

わたしを呑み込んで残った

習作四 ぼくの馬

あの少年がふり向いて見たものを

何よりも 知りたかった

時間の地平線を疾走し

空高く舞い上がって見定めたかった

だが 草原に蹄の音はなく

森の中にも大きな翼の羽ばたきはなかった

せめてもと 奥義書をあさったが

駿馬も天馬も創れなかった

ひとり 哲学という大地を踏み台に

詩人の情熱を借り跳ね上がった

音楽のように飛翔し

絵画のように鳥瞰しようと

だが 一枚のよれよれの墨絵のように崩れ

小さな破裂音となって消えた

もらったときの純朴な裸体が

そのまま天馬になれたのかもしれない

もうぼくの中からそれが飛び出して久しい

ふり向いて ただ自分自身の少年を見る

もしかしたら 空間そのものが巨大な…

習作五 あなたの馬になれなかったぼく

あの少年がふりかえって見た世界へ
確かにすぐ天馬が駆け出していった

だがアフロディテよ　そして　おまえ
ぼくはやせ萎えた脚をみつめるばかり
山々の頂や海底に立つこともなく

自ら何ものをも見いだせず生み出せず
せめて既成のものだけでも捉えようと
管弦の詩歌奏でる世界あちこちの美の館を
机上でさすらった

だがそれさえ　形として贈ることなく

ミネルヴァのフクロウは一度も聞こえず
一人のムーサイも現れなかった
オフィリアよ　あれほど美しかったのに

人々の前にウエヌスとなることもなく

おまえはもう沈み込んでゆく

罪人のぼくこそいく 水中の分子へ解体し

宇宙開闢の素粒子への帰還

生きたことは すべて夢だった

ただ 美のありかと幸福の何かを

天馬だけが知らせ去ったのかもしれない

宇宙と己

照明

宇宙開闢以来、百四十億年も降り注ぐ
天地創造以来、四十五億年も降り注ぐ

一億年ってどのくらいの年月だろう
インフレーション宇宙論も

素粒子論や大統一場の理論も知らない
人類誕生以来 二十五万年も降り注ぐ
縄文人以来 一万年も降り注ぐ

ようやく歴史が感じられるようになる

こんなに降り注ぐ その膨大な量

それを受容する眼のつくりも不思議だ

さらにそれを解釈する脳も不思議だ

そして そのように不思議だと思ふ心も

スーフィーもカバラも知らない

キエティズムもタオイズムも

永遠に あるいは生成消滅を繰り返しながら
森羅万象を照らす

私たちに 知れ と

心まで直に降り注げ と

宇宙の空

巨大な眼 おそらくひとつなのだろう

大宇宙が寄り集まった渦巻きを鳥瞰している

一つの泡に幾多もの宇宙が蠢き

遠い遙か今

一つの宙に数多もの銀河団が淀み流れ

遠い遙かここ

一つの銀河が揺れ動き廻る

遠大な眼は 遙か光速より今ここを透徹し

大公転を知らぬ惑星はいつまでも自転し続ける

鼓動が突然止まる恐れを知らぬかのように

どれだけ広かろうが 実在するのは恒星

在ることの意義は いかに年輪を刻むことか

深めようと 四季に十二宮を刻印し

なお三十六の季節を観音する

在ることの飽くなき積分

だが いつか 一瞬の自覚に戦慄する

限りなき微分でしかない鼓動という自転

脳も萎縮し同語反復の自己回帰

吐き出された塵埃に息苦しくなる

在ることの宿痾を背負い 櫓を漕ぎ出す

大公転が航海を照明するだろう

銀河の波浪を渡航し 大宇宙の渦を出帆して

あの巨大な眼の前に立つのだ

思いつき呼吸ができるように

宇宙遺伝子

私と

鳥もメダカも

そして雑草も

同じ遺伝子の同胞

あなたたちも

雲や波と

そして山の岩と

同じ地球遺伝子を持ち

かれらもみんな

太陽と銀河や

そして星雲と

同じ宇宙遺伝子をもって

だからこそ

素粒子が改変しては飛び

星々が燃え続け

私の中に愛が芽生える

熱の輪廻

どこかの銀河が

遠い宇宙空間をかすかに温めていた

温められたそのある箇所がかすかにうごめき

そこに宇宙の風が生じ星雲が湧いた

太陽が温めた大気に

風が雲を運んできた

きらきらする雨は大地に浸み込み

地下に光る湖ができた

湖底からマグマが噴き出し

そこに小さな生命が生まれた

幾世代も経てその子孫のまた子孫が

徐々に進化しながら

徐々に地中を這い上がってきては

ついにひとつの生命が地上に這い出た
そして太陽に向かって叫んだ

「おかあさん！」

だが すでに太陽はなくなっていた

ある燃え尽きた太陽はどこかの星となって
遠い銀河に温められていた
いつかもう一度太陽になるために

あの道が舗装つくされ かの石が隠されるように
私の中の土も減っていく
支えが崩れ 用途が壊れ 保護は抜け落ち
知的遺産の連帯が次々と忘却の淵へとほぐれていく
私の中に土がなくなっていく

風だけが残り

大気が汚染に狂おい 塊と化すその端の息苦しきで
私の中に風だけが残る

意志が超微粒子に吹断され

存在の影も 輪郭なく宙に霧散する

私の中の風 も まもなく止むのだろう

誰によって 何によって 偶然による必然の

生成消滅の流転が繰り返されるのか

人類の絆 まして個など すべて無に帰するもの

だからいま 存在を探るのか

不安定な内なる四大

精神力が宿るといふ胆

感情が宿るといふ心の臓

そんな肉塊から感情や精神が生じるのか
心臓がいつ疲れて止まるか不安だ

生を息吹かす血漿やリンパ液

誕生を証す精液や羊水そして乳汁

そんな命を守りながら循環する水
脳漿がいつ汚泥し詰まるか心配だ

血がもたらす新陳代謝は内なる火力を産む

ミトコンドリアのTCA回路は燃え続け

骨を含む全細胞が三ヶ月で入れ替わる

眠っている癌細胞に誤って飛火しないか恐れ

風は風 呼吸により体内に入り巡遊する
臓腑だけではない神経そして脳電流へ

睡眠中の呼吸は不随意筋によるが

知らぬ間に胸郭運動が止まりはしないか戦き

内から風で聴き火で観て外へ水で動き土で触れ

それでいて体中いつも陰鬱な雪が降り注ぐ

寝ていても心の闇の中しんしんと降る

雪は風を運び火を潜む内なる涙の結晶か

世界は傾いて動いている

霜月の夜十時　なりきれない雪のかけら
弱い　しかし鋭い風　になぶられ

街灯が映る風除室の　アルミ戸にぶつかる
西に低く朧に上弦の月が　転んでいる

月の向きにつられて　頸を傾げ

思わず　そのまま　太陽の方角をふり向く
月に視線をもどすと　途端に足元がぐらつく

地軸の傾き二十三・五度　の初冬

さらにここは北緯四十度三十三分で　夜

公転と自転に眩暈がし

理性で直立を保とうとしても

傾ぎすぎて　地球から滑り落ちそうになる

地球の真裏に最も近づくのだろう　冬の夜

漢和も英和も文字は紙に埋もれて見え
遠視で読みづらくなっている

せつかくの中級機のステレオも

右耳の聴力が衰えている

私も 人生の裏側に限りなく接近していく

左耳に小指をつつ込むと

ヴァイオリンの音は遙か遠い

宇宙の真理を秘める女に満ち欠けがあり

素粒子の壊変も同じなのだろう

凡夫の人生にも満ち欠けがあつて

幾たびも傾ぎ 小さな小さな栄枯盛衰

でも 一度でも満月はあつただろうか

出遅れた出発 早すぎる凋落

愚行だけが残り蔓延する

地上も 傾きさえ忘れて殺戮ばかり

それだけに まん丸と

追憶の中でいまだ輝いているのは 幻か

直線回帰

地平線はるかどこまで進んでも

移り変わる風景はいつも虚像

地図は最初から固定した虚構

深山に大地の果ては隠され

どこまでもちっぽけな人影がまつすぐ

砂山の蟻のように釈迦の掌の上か

日が昇っては沈むその軌道は

はるか大地より大きく

地上から最もな直線でもあろう

夕陽が膨張破裂して星々と散り

残ったのがすうっと月

払暁 月に星々が集まり蘇る太陽

いまだ大地の裏は暗黒

帆船が徐々に水平線に消えゆくように

確かに地球は丸い現象なのだろう

水平にどこまでも進んでいくと

また後ろから戻ってくる幻視

子どもでも知っている事実だが

いまだ誰も実証していない

頭上垂直に大気圏を突き進むと

またここに戻ってくるのだろう

今度は背後からではなく真正面から

巨人の小指の爪がひと掻きすると

たちまち潰れるこの宇宙

巨大な眼がそう教えたのは

初めて詩を書き落とした四十年前だったか

いや四十億年前だったか

反重力

一枚の枯葉が風に飛んでいった
侘しくなり涙が零れると

地面に冷やされ空へ舞い上がっていった

すると坂道に沿った水路が逆流し

空気も上へ上へと上昇した

追うように地面から次々と草木が生え出

根こそぎ空へ向かった

飛べない虫はそれに乗っかかり

いち早く飛翔していた虫たちを追った

林は消え森はすでに裸になっていた

小石も吸い込まれるように飛んでいく

残った殺伐とした道路とビルのかたまり

乗り捨てられた車と電車

人々はどこへ行ったのだろう
冷気も温かくなつた上空に引かれ
もはや地上には温度も空気もない

上空は夕焼けのように輝き

湖が竜巻をなして登つていき

そろそろと岩もゆっくり動きだす

熱くなつた空から

まもなく火の粉が降つてきそうだ

思い出したくない事柄だけが

心の底へ底へと堆積し沈んでいく

もしそこに火が落ちてきたら

海の時間

真っ青な夏

岩場に腰掛け静かな海を眺める

底光りする広大な物体のようだ

人類が領土の争奪に明け暮れてきたのを

あざ笑うかのようにきらきらと上空へ信号を送る

様々な時代と領地を清めながら

あちこちから回遊してきた流れを凝聚し

記憶を収斂させ海淵に沈殿させる

そこに輝く泡が生じ

浮上して海面から一条の光となって放たれる

塩分濃度三・五%

川育ちに海はあまりにも塩辛い

生命が誕生した原初の海はカリウム濃度が高く

細胞内液はその頃の海水に近いという

生命が陸に上がった時代はナトリウムの比率が高く浸透圧の低い細胞外液はその頃の海水に近いというだから恐くても海が好きで懂れているのだろう地殻から熔解したアルカリ金属の濃度が上昇し塩分濃度も徐々に濃くなっている

人類が誕生した頃どこかの森に降った雨粒がいまようやく河口に辿り着いたような気がするそれは 私の体内をも巡った一滴かもしれない

海と空との間の微かな潮風の空間でその空間を体中に染み込ませ満たし溶けて光のようにすっと軽くなりたい

在り処

空中を泳ぐようにずんずん舞い上がっていく
平野 山地 国々 地球と小さくなっていき
相対的に自分が大きくなる

そして 足元に何も見えなくなった時
周りの空間はどんな色をしているのだろうか

どんどん暗くなるどころか

素晴らしく明るくなっていく青に違いない

高嶺に咲くイワギキョウでも

急峻な峰を仰いだ時の紺碧でもない

地上で見たことのない雲集した青の光子

軽くなり静止し浮遊する

そこは宇宙の海の中かもしれない

そう思うと 沈んでいくような気もちになり

ゆっくりゆっくり独りでに下方へ降りていく
やがて 黒い海底がぼんやりと見えてくる

黒いと思つた海底は濃い青の塊であり

降りるとそこが本当の地球のような気がした

神秘的な湖あるいは青い森の中にいるような

目の前を魚や小動物の群れが過っていく

遠くに水平線か地平線かがぼんやりと現れ

上方を鳥の群れがゆっくり飛んでいく

仰ぐと 水中から水面を仰いだような紺青

自分の存在に気づくと 枯木に化す

街と自分

白い満月

夏の終わりの晴天 金曜日の朝

児童たちが振り返っては小刻みに走る

時に笑みを浮かべ黙々と進む中学生たち

高校生たちは坂道も腰を上げ自転車をこぐ

大学生も車もまだまばらにのんびりと

まちまちな向き先が路上を跳ね返しあう

なおさらにまぶしいのが徒歩の通勤者たち

旧態依然の平々凡々な街並みに

大げさな看板絵もなく 人間たちが主役

人の外向けの真顔は

唯一通勤通学の中にあるのだろう

ほのぼの明けのままに陽光ほのぼのと
いたるところの陰に影はなく
空気はすっきりさっぱり
ほんのりとした山の上に
顔を洗った素顔の満月

知らなかった

平日の朝ってこうだったんだ

長距離通勤者は ずっと忘れていた

そして 知った

月が見えぬ妖精となって

日中の街中を流離うことを

ねふた

ちびっこネプタのお通りだあい トン コトンコ トン コトン
七月中旬 繁華でない商店街の夏祭 裏通り風小通りの提灯祭
ヤーレヤーレ ヤーレヤー ねふたッコ 見デケロジャ
小さな私鉄の駅があり大学生もぶらつく界限

電鉄の発着音が出店と歩行者天国を賑わす

ちびっこネプタのお通りだあい トン コトンコ トン コトン

高校生ネプタがまかり通る ダン カダンカ ダンカダン

七月下旬 繁華街をクラスごとの手製の組ネプタが練り歩く

旧制高校の蛮カラに各々の浴衣や鮮やかな和服 襷はみなピンク

ダン カダンカ ダンカダン アッ

腕を振り上げ一斉に跳ね上がる ぐるぐる輪になって跳ね上がる

ヤーレヤーレ ヤーレヤー アッ 見送り絵にアニメ風美少女

ダン カダンカ ダンカダン アッ

町内ネプタの御披露目だ ドン コドンコ ドーンコドン

七月末 一軒一軒から賛助金を集めご披露だ ヤーヤドー

暗く狭い街路を揃いの半纏で青年が台を牽き親子連れが綱を引く

ドン コドンコ ドーンコドン オツ

鏡絵の勇壮な三国志の武者に 見送り絵の艶麗な定命の美姫

ドン コドンコ ドーンコドン オツ

八月だ 津軽藩祖が始めたと伝えられるネムリ流し

藩祖の幼名がへ扇だから扇ネムタ 開きには藩の家紋の牡丹花

ドン コドンコ ピーヒヤララ オツ

お城の堀端から城下にネプタがずらりと並び合同運行

手振り鉦が チャン カチャンカ チャンカチャン オツ

巨大なじよつぱり太鼓に晒を巻いた女三人並んで跨り叩く

ドン コドンコ チャンカチャン オツ

ドン コドンコ ピーヒヤララ オツ ヤーヤドー

哀歌 —— 抵抗のための ——

古都とは

遺産におんぶされ しがらみをほどけず

視野が狭いまま時流に乗り出せず

廃れゆくから古都なのだろう

慣習により個々人の習慣にさえ精気が失われ

ここは一度でも古都であったのだろうか

いつの過去 どんな遺産が

子らの生地は県都に併合され落胆がつづく

周辺と協同の田園都市の希望も消え

学都と文化都市という称号も失いつつある

りんごにもネプタにも街の名が消えて久しい

何もできぬ愚人はこころの奥で叫ぶ

見えない炭火のようであるうが

グローバリズムな金権と策略に抗し

たとえばドイツ　あのオーケストラ大国
著名な七十もの楽団を並べてみると

ベルリン・フィルよりバンベルクの轟き
改めて注目されている八十もの美術館でも
ベルリン美術館群よりワイマールの輝き
それぞれ人口たかだか八万、七万
小さくても　古くても　永遠へ向かう何か

街に三管編成のホールがなくとも

街路を音楽人がたくさん歩いている

街に美術館がなくとも

川辺に絵描きがたくさん腰掛けている

そして　窓辺にも書き　外には物づくりも

残った最後の大切なもの

それをバネに怯まず　そして次世代に

世界の果てなのに

どうしてこんなに忙しいのか

何もないはずなのに

どうしてこんなに追われるのか

人もまばらなのに どうして……

今朝 遠くとも日曜自主出勤

街で最も広い交差点を急いで曲がったら

出会い頭に数羽の雀が飛び込んでくる

ぶつくと鈍い音

一人何役もの偽装から抜け

果てのさらなる果ての

あの門に向かって

内からバーンと石扉を閉めたい

この世の五風十雨よりもっと
湯上りの夕涼みに溶けるかのように
雨も風もない陽射しだけの空へ

彼が突然逝ったように

連理

人が近づくと

カラス二羽が鳴き騒ぐ

子どもが生まれたのだ

通路を避けざるを得ず

近づくと威嚇しながら飛んでくる
通り過ぎると

後頭部に翼の風圧を受け

細菌の伝染を恐れ無性に髪を払う

※

番いが狂ったように鳴き叫ぶ

雛が落ちて怪我をしているのだ

木々枝々を飛び移りながら

ただ鳴き叫ぶことしかできない
誰かが頭を突っつかれた

毎年の光景だが
毎年 そのとき
わが子を思い出し親になる

※

かつて同じ場所で
雉が人に驚いて急に飛び立ち
誤ってテラスの窓ガラスに直撃
その夜 誰かが鍋にした

雉だったはずなのにカラスの雛を食べ
カラスになった
夢をみた

夜行バスを降りて

初日は林立する高層ビルの間で路面みえぬ雑踏にいた
ステーション・ビルの地下迷宮の喧騒にいた

翌朝夜行バスを降り人気ない駅舎に向かう

一件だけ早朝開店する小さなドーナツ・カフェもまだ閉店
時間が眠ったままどのホームにも始発のバスがない

閑散な駅前を閑散なままにぶらつく

幾つかの数階建てのビルに小さな店舗だらけで空店舗

数件の中層のホテルとマンションに青空が大きく広がる

時代に取り残され地方の文化都市の名も廃れゆく

背景となる経済基盤の林檎と米もその力を失いつつ

年中真冬かのように人々はますます無口になる

雲のキャンバスに風の楽土だけの風土そのままに

昨日の美術館とホールの静けさだけは同じだった

カフェを出ると向こうのバス停で女が見送っていた
こちらのバス停に陽気に移って来て

「あの人（ふと）五所川原さ行ぐんだネ」

あどけない笑顔が近づいて来た大学生にも話しかける
どこかで会ったような印象を与える女

数えるほどでもない乗客の同じ始発に乗り込む
幾箇所か途中で乗り込んだ乗客が運転手と挨拶を交わす

十分分でバスを降り十分歩くと我が家

最後に林檎畑の緩やかな舗装を歩きながら

ゆっくり眺めたい二冊の図録が入った鞆の重み

うっ、コンサートのパンフをホール座席に忘れてきた

雪のトリオ・ソナタ

松林に　こんこんと降る

私のために降っているのではない

冬眠する獣たちを隠すためでもない

ひたすら古里の地中に戻るかのように

こんこんと降り続ける

それは　何かが始まりそうな前奏

観客席が暗くなるように　幹が薄れ消えゆく

暖冬だけに　遅れを　いや過去を取り戻すかのように

白に白を積み重ね　さらに純白に

風に揺れ　ほぼ一斉に

枝葉の雪がすだれのようにくずれ落ちる

雪のカーテン　粉雪舞い上がる無色のオーロラ

吹雪の予兆か　小さなつむじが雪原を走る

が　雪が止み　樹間に　雪の原に　陽光がさす

松の影が雪面の窪みに沿って湾曲し
曲った影に等間隔に挟まれた陽射しは 遙か明るい
風もないのに ほぼ一斉に
枝葉に積もっていた雪が落下する
塊が先に落ち 雪片が飛沫となる
突然 ボキッと雪の重みで枝が折れ
捨石のようにぼたり

また雪が こんこんと降る
この世の空間を占有しながら
この世は通過点に過ぎず
この世とは無縁に しんしんと
切れ間なく弓矢が次々飛んで来そうな
綿雪がふわふわ途切れず降臨しては
そのひとつひとつに菩薩が座つていそうな
陽射しを一瞬受けた風との 蛍雪のきらめき

非在

風ちぎれ 雲沈み

真つ白な南八甲田の峰に日が昇る

点景にほっかむりの農婦

自転車の荷台に長柄の鎌を結わえ

平地の林檎畑に向かってペダルをこぐ

遠く田圃が続く真つ直ぐな農道

車が猛スピードで走っていく

どこへ隠れたのか身近だった自然よ

山際の清掃工場の煙突から白煙たなびき

ずれた季節に頭上を白鳥が去る

いつごろ消えたのか内なる自然よ

種まき終え育苗する津軽平野から

いまだ深い残雪を抱く岩木山

望遠鏡で覗いているかのように迫る
小さく 農夫が鋤を担ぎ家路を急ぐ
雲岩と化し狭間の夕陽山影で灰燼に帰す
宇宙で跳ね返り 地維むくれ

玄関と僕

残光

霜月の十三夜 木々に陰の上

冷え冷えとした月の面は 厚みもない

過去を埋め続けた記憶の女神のような 沈黙

照り返しの奥から追憶のイメージも湧かず

玄関先で蛍族はもう一本火をつける

自衛隊の消灯ランプが侘しく聞こえる

戦争という言葉の前にまず兵士を思いやり

帰宅直前にすれ違った救急車の心騒ぎを思い出す

閑寂枯淡境地は遙か遠く

玄関脇の小さな足洗い場

長靴は一度も洗ったことがない

水を入れたバケツと吸殻入れのガラス瓶

吸い終えたタバコをバケツに突っ込む

バツタが浮んでいる

バケツの水を流すと排水溝の枯葉に死骸がひっかかる

記憶が失われるかのように 水は少しずつ排出され

量が少なくなると枯葉が揺れ出す

ついに葉っぱは小刻みに威勢よく揺れ続け

目覚めか蘇生か バツタの手足が動き始めた

林檎を割ったら

中は熟した柿だった

皮ごと食べたら

咽の奥で言葉がとろけた

古書を開くと

リュートが響き

耳をそばだてると

原生林の風景がひろがった

そして 胸の奥が膨らんだ

そんな他愛もない詩片が

居間で伏臥していると突然湧き 玄関に出たのだった

霜月の十三夜 月は冷たい古鏡

半死のバツタのように すべてが止まっている

人生も 長い休眠に過ぎぬのだろう

深い静寂に二階の息子たちの部屋はまだ明るい

あすは初雪よ 弁当作りで早起きの家内はもう布団の中

凡夫は玄関先でもう一服つける

ポスト団塊世代の自覚があつてか、一時中断した趣味の世界に今ますます耽溺しつつある。以下の近況はその現われであろうか。

一昨年から二年がかりで「世界の交響曲」というファイルを作り、自分のホームページにアップした。自分が所持しているCDの整理のためだが、ベートーベン以降の作曲家が約五百名、交響曲が約千百曲となった。作曲家の生没年地、交響曲の作曲年ぐらいのデータで、略歴も作品解説もない単なる項目の羅列ではないが、それでも二年を費やした。

その延長として、今年は一月から一年がかりで「世界の現代詩人たち」というファイルを作るつもりである。今回は部分的にできあがればその都度ホームページにアップしており、「ドイツの現代詩人たち」から始まって、ロシア、フランス、イギリス、そしてアメリカまでは終わった。以上で約二百七十名。まもなく「南欧の現代詩人たち」をアップする予定である。

アンソロジーの訳詩集を主な参考書としており、他に徐々に雑誌も含め、やがてわが家に一編でも訳詩があればその現代詩人をも取り上げるようになった。詩人の簡単な略歴を打っているだけだが、これが思うように進捗しない。もう半年経過した。ほぼ基本的なデータが既にある東欧、北欧、ラテンアメリカはあまり苦勞はいらないだろう。問題は「アジア、アフリカの現代詩人たち」である。愚生の全く不勉強な世界である。

シシユポス

涙に曇り玄関を出ると
お山も霧に濡れ霞んでいた

まもなく懐も寒くなり
岩木山も真つ白に空に消える

やがて風邪で寝込み
巖鬼山は見えなくなるだろう

一緒に生きてきたお山
皆で頂に登った幸せ

あれは何年前だったろうか

あれからずっと下り続け
気づくと我家も通り過ぎ

次第に寒くなりながら
まだ下り続けている

巖鬼山…お山（岩木山）山頂の
三峰の一つ

詩誌「ゆすりか」75号
筆書きの折込巻頭詩

シンスポス

瀬川紀雄

涙に曇り玄関に出ると
お山も霧に濡れ霞んでいた
さもなく懐も寒くなり
岩木山も真つ白に空に消える
やがて風邪で寝込み
巖鬼山は見えなくなるだらう

一峰に生きてきたお山
皆で頂上に登ったやせ
あれは何年前だったらうか
あれからずっと下り続
けり
気づくとき家も通り過ぎ
次第に寒くなりながら
まだ下り続けている

停止した時間

いつものように 夜遅く狭い敷地に逃げてくる
途上で詩の片を浮かべながら長距離通勤の愛煙家
いつものように 窓を開けっ放しで車を降りる
風除室のアルミサッシ戸の前にカマキリがいた
危うく蹴るところだった

いつものように 着替えすぐパソコンをオンにする
残された時間に生きようと晩飯を喰いパスワードを入力
音画のためではない禁欲的にただ文章のため
机上の活字から 地球を一周して内的宇宙への夢想の旅

いつものように 食後は一服と玄関に出るとまだいた
稲が枯れたような色と形で折り曲げられた針金
鎌手を半ば持ち上げたままじっとしている
細く半透明な見えにくい触覚をぴーんと伸ばしたまま

風除室の照明に向かいサッシ硝子に阻まれる虫を待つ

いつものように 休憩は決まって玄関先で一服

蠓螂はまだ同じ姿勢でじっとしている

サッシ硝子には最初から虫はいない

時間が止まっている

そろそろ車の窓を閉めドアの音が静寂の中に響く

いつものように 幾度か玄関先で月を眺めながら一服

蠓螂は少しサッシ窓から離れて

鎌手を前より少し下げ じっとしている

我が家の前の電柱の街灯にも虫はいない

いつものように 歯磨き前の最後の一服

近くの自衛隊の消灯ラッパが鳴り 蠓螂はもういない

街灯下の桶にワラジムシや蟻、オケラが動き回っている

時間が止まったから 夜の運動会を始めたかのように

シエカよ

燦然たる黄金の光輝に満ちながら

空間の中に新たな空間を生み

奥行をさらに奥まらせるものよ

拡がりとおまりがやがて冥合し

そこ遡源に揺らぎを生み

遡りながらすべてを甘美に交響させるものよ

なのに私は雨の車中

半開きのドアに傘を開いたまま煙草を吸う

フロントガラスに次々と雨粒がぶつかり

一瞬の水輪を成し流れ落ちる

隣の子は保育園最後の運動会

おばさんがお菓子を持って飛行機で応援に

と照れながら喜んでいたが生憎の雨だった

密雲低く垂れこめた夕方

暗雲の濃淡はどこか病んだ内臓のようだった

その夜 暗い雲間に見えた小さな赤い月

悪魔の乳首か悪性腫瘍のようだった

だが山懐のような襞と多彩な波紋

それらが縦横に綾を成し

他方向にいくつもの純色をもつ純色よ

天空に在り地底まで煌々と放射し

同時に地心から天上へ爛々と輻射するものよ

美色に彩り美音を奏でる真善美の具現者よ

もしや なおまだ何者かの使者なのか

退行

日曜の早朝 玄関先で新聞紙を敷き腰掛け一服

小雀一羽いて 最初は私に驚いたろうが逃げない

こちらに時々眼を向けながら

落ち着いて餌を探しているかのような

まだ稚く人に好奇心を寄せているかのような

少しずつちよんちよんと離れていく

十七にして文学、美術、音楽に目覚め学を志す

三十七にしてそれらの冗費を得て而立

遅れ四十七のつもりが四十九にして旗揚げし惑わず

五十七にして天命を知るべきが五十九にしてただ死す

従心どころか耳順もはるか遠いまま

生涯ずっとただ世人に従順であった

次の日の夜 玄関先で傘をさし立ちながら一服

カミキリが一匹玄關の灯火につられ踏み台の上

三回目の一服でもまだじっと動かずいた

大型種の夜行性ウスバカミキリ

夜行性もそうだが薄翅は様々な進化の証明だという

弱っているのかなと思いつながら掴んでみると

やはり首を向けもがき戦闘的な気性

だがギーギーという鳴き声は聞こえなかった

いや 聴力が大分衰えているのだろう

衰退していくなか 最後は闘病であぐのか

自分の人生を思いながら 元に戻す

同じ時間に

年末年始ずっと雪で積雪六十センチ
二〇一〇年は白の世界から始まる

雪の合間の十時過ぎにようやく雪掻きに出る
南隣りの祖父と孫が家の後方まで除雪している

明けましておめでとうございます
赤いスノーダンプが色鮮やか

子どもの声がなおさら新年らしくする
北隣りの夫婦が出てきて

明けましておめでとうございます
先隣の奥さんも向かいの主人も出てきて

皆近くの同じ空地まで排雪

そこは次第に傾斜を強める雪捨ての一本道
譲り合いながら どうぞ今年もよろしく
綿雪がふわふわと降り出してきたが

向かい両隣から夫婦や親子が出てきて雪掻き

遠くから おめでとうございます

あとは皆無言で除雪・排雪に精を出す

雪は次第にしんしんとなり人々の影が隠されてくる

やがて一人消え、夫婦も親子もぼつりぼつり消え

最後に向かいの主人の姿も消え

道路にこんこんと灰雪が降る

居間のサッシ戸の薄地カーテンも開けっ放しにし

粉雪が舞う白だけの景色を眺める

でもなぜかまた外に出たくなる

翅雪

節電に玄関の外灯は消灯のまま
風除室だけで玄関ポーチはなく
白い階段二段で敷地の白い地べた
しばれて靴がキュッキュツと鳴る
日中の最高気温は零下五度だった
電線も鉄塔も着雪し真っ白だった

風雪除けに透明な傘を差し喫煙
コンクリートの電信柱も真っ白
そこの街燈がきらきら輝いている
斜めにふわふわ降るなか
突然魚の群れのように舞い上がり
更に別な群れが地吹雪のように横殴る
見えて飽きない白い翅虫たちの乱舞
何とも気ままに泳ぐ小さな天使たち

きつと宇宙からやってきたのだろう

地球全体が雪雲に覆われたら

宇宙からどのように見えるのだろうか

黒の防寒着を白に変えたくなる

消えゆく雪

日曜日の朝五時半の玄関先で

自由を感じる

土曜日に遅く帰宅し喉に酒を潤し

玄関先で一服する時に次いで

自由を感じる

雨かなと疑わせるほどの

疎らな雨

痩せた身を雨と雨の隙間をぬって

濡れさせなくともいいような

疎らな雨

雨が雪に変わる

四月十八日だというのに

心と同様に季候は狂っているのだ

雪は地面に着く前に消え

まるで素粒子を見ているかのよう

濡れた地面はとても静かだ

千切れ雲が次々と流れていく

層雲の明るい部分が青みがかってくる

束の間覗く薄雲を覆った朝日が大きく

なぜか月を思いやる

皆で下手なお山の春スキーと思っていたが

生憎の天気で正月に転んだ親指がまだ痛い

街の水墨画家たちの展覧会でも観に行こう

元季の四大家、季朝初期の安堅派、

そして雪舟両派を念頭に置きながら

同時にそれらを捨象し純朴に

清浄な世界で心を滑らそう

命の糸遊

曇天の蒸し暑い夏の夕方

どこから羽化したのか

向いの家並みの間に蚊柱が浮く

空中の陽だまりに羽音なく舞い狂い

一瞬の交尾を求めての熱情

蚊柱にノシメトンボがホバリングしてはまといつく

じやれているように見えるが 食餌か

正面の夕日が眩しい

あしたは低気圧が近づき降雨になるのだろう

慶雲たなびくのはいつのことか

人に驚いた雉が慌てて飛び立ち

まっしぐらにバルコニーのガラスに衝突する

芝生に落ちた体は目を閉じたまま

分厚いメタリックな絹を思わせる青緑の胸や腹

体を両手で支え上げても

光沢のある藍青色の頸がふにやっとし

真っ赤な顔は地べたのまま

両手に体温が伝わってくる

丸い茶色と黄色い線の雨覆羽と茶黒い横斑の尾羽

極彩色な国鳥だが 呆気ない往生

埋めれずビニールの買物袋に入れごみ捨て場へ

誰かが雉汁にして供養してくれたらしい

私も何を成し生きてきたというのだろう

物理的な時間の長さではない

カゲロウも、若鳥も、人生も

何と儚いことか

私の骨を食べてくれるのは微生物たちか

自室と我

休日の土曜日

早朝 アカシアの木立に明るい囀り

芝生となった庭の草むらに 紅いシジミ蝶
思いつ切り下翅を広げ陽光を浴びている

前衛に イタリアの現代詩人たちを読む

珈琲カップを掴みながら青空にすがすがしく溶け込む

息子たちが試合や練習に消えた知らぬ間
足元を蟻と小さな蜘蛛が歩き回る

純粹に イタリアの現代詩人たちを読む

妻が美容院へ行ったあとの松葉牡丹

祖父が練習をのぞきに行ったこっそりさ

昼前の庭　珈琲と喫煙の快晴はなごやかだ

断章に　イタリアの現代詩人たちを読む

息子たちはまだ帰ってこない　言葉だけが居座り
妻は自転車で買物　祖父は競技の下見に遠く走^{ばし}り
午後の庭　珈琲と喫煙の快晴はのどかだ

黄昏に　イタリアの近代詩人たちを読む

みんな帰ってきたが　とても静かだ

暮れなずむ電線で　影となった郭公が鳴く

向かいの犬小屋で音がし畑の老婦が家に入り込む

何もない薄っぺらな日常　だが明日は日曜

形而内

無を思考しても無だから

すべてに失意のおれを重ね

生存だけは保とうと机上であがく

無の思考は誕生を偲ぶためにかもしれない

老いた無数の脳ニューロンが溶け

消えゆくその哀悼歌かもしれない

無が充滿するなかを

ひとつの無が超高速で動く

あまりの速さにどんな動きなのかつかめない

だから無なのだろう

動いているはずの無が

他のすべての無から停止し

取り残されたように縮こまっている

だから無なのだろう

停止し同時に動いている無

静止は隙間で運動は痕跡

ぶつかりあうこともなく何事も残さない
だから無なのだろう

揺られながらも孤立したまま

静止し捨てられた時間と化す

貫かれ もみ消される一個の時空

無だからだろう宿命

足下が沈んでいきながら

頭上に死んだ時間が積み重なってくる

かすかに無の風が聞こえる

超高速の無の束だったか

わたしの悲鳴だったか

唯一救いの観念も泡となって消える

万年浪人生

受験科目はずっと一科目だけ
進捗せず季節の変わり目に焦燥ばかり
それを何年も繰り返してきた

五分野すべて満遍なくお浸いしているつもりが
肝心な「論理学」では、明快なはずの文法が絡み合い
苦手な「自然学」では、いまだ根本的な推量ができない
広範な「倫理学」では、人間観察も社会認識も浅く
得意なはずの「詩学」もまだまだ質量ともに了解不足
そして好事の「美学」で余計なことばかり

出題傾向は知っている

「自然」から「真理」、
「倫理」から「正義」が取り上げられ
両者の関連性が問われるのだ
まず問題を数理的に解釈し

修辭的に叙述を進めなくていけない

結論の答えも最初から分かっている

隠れた「人間学」から顕現する「愛」

でも、年とともに、それが「命」のように思え

今ではそれが「死」のように思えてきた

結局、また答えられないであろう

ところで いつ受験日だったろう

溜め息

ためいきに残っていたもの

それを 雪解けのように唾液に溶かした

のどに引っかかっていたもの

それを 若芽の香りとともに一思いに呑み込んだ

胸につつかえていたもの

それを 春の息吹とともに思いつきり吐き出した

そして

腸を煮えたぎらせていたものら

それらを 草むらにごろごろ横にころがしながら

次々と排出した

だが翌日

政治の動きに不安を覚え

うっかり また

ためいきをのどに引っかけてしまった

それを何度もくりかえしているうちに

つぎつぎと押し込まれ

胸が苦しくなり

そして みるみる下っ腹が膨らんできた

人生どころか

月々の苦しみの輪廻

ある肖像

風の中を風が吹き

雨の中に雨が降り

彼は詩人哲学者兼画家作曲家だった

もちろん指揮者でピアニストだった

アマチュアのナチュラリスト兼登山家であり

幾つかの言語を駆使するプログラマーであった

そして何よりも愛妻家で家庭を大切にした

ぼくはスケッチも描けず歌の一つも歌えない

もちろん思想など端から書けるはずがない

グローバリズムに怯え民族紛争に痛みながらも

ただ彼という夢を夢想し続けた

風のように風が吹き

雨のように雨が降り

ぼくは早朝家を出て夜遅く帰宅する長距離通勤者
役職に無縁なただのサラリーマン

家庭奉仕も住民活動もない人生の失敗者

皺まり歯が抜け本卦還りが近づくとこのように
思春期の青年のように口を閉ざしたまま震え
滑稽でも心の中でしくしくする

女々しくもせめて涙が言の葉にでもなればと
まだ夢想到憧れ追い求める

風が吹けば吹かれ
雨が降れば降られ

反復の死

早朝四時半の窓に

林檎畑の向こう樹間に真っ赤な朝日

昨年度の自殺者三万二千二百五十人

うち本県が五百十三人で

人口十万人当たりの自殺率は三十七人

紙面による憂鬱な一日の始まり

メキシコから発した新型ウイルス

死亡者が七十名になり指導者たちが騒いでいるとき

サブプライム問題から発した世界的同時不況は続く

自殺の原因が就職失敗・失業・生活苦で増加

深刻なワーキングプアや実質のホームレスの急増

自殺の動機としてそれらによる鬱病の激増

悪いことばかりが増え 社会主義が崩壊したように

いままさに資本主義の瓦解　その音が聞こえる
完全失業率も六%を超え自殺率はもうかなり上昇
他に　金のためにとうに自殺している者もいるが

薄曇りにもう樹上白く眩しい太陽

やがて日没で燃え尽きるのだろう

明日また昇ると思っっているのは錯覚かもしれない

一回限りの人生　一日限りの生

若き日に憧れた哲学的そして芸術家的自殺

老いと共にその浅薄さを恥じるが　相違はどこに

余儀なくされた悽愴な自殺者たち

そう　今日の私もまもなく死ぬ

一日限りの命　儂き人生　瞬間の積分の崩壊

死をいくら重ねても生にはならない

明朝目覚めると思っっているのは錯覚なのだろう

カリキュラム

空想大学人文学部文学科哲学専攻（日々教育課程と時間割の修正に追われる現実）に疲れてぼさつと紙面の詰め将棋を解くように若い時からの清遊であり 遣る瀬無い時の手弄りだった

一般基礎科目は英独仏語と人文・社会・自然各分野から
もつと深めたい歴史学・心理学・文学・美術・音楽

いまだ学びたい地理学・社会学・経済学・政治学・法学
今なお知りたい数学・物理学・化学・地学・生物学

専門基礎科目はまず哲学概論、そして七学七科目

形而上学・論理学・自然学・人間学・倫理学・詩学・美学

西洋が古代・中世・近世・近代で東洋がインド・中国・日本哲学

専門演習はデカルト・ロック・カントに仏陀・老子・道元

専門科目は 哲学講読がベルグソン・ラッセル・フッサールに禅書

現代哲学は構造・現象・分析・情報・生命・環境・制度哲学

哲学講義が言語・心理・文芸・芸術・音楽哲学に歴史・社会・

経済・政治・法哲学そして数理・科学・宇宙・物理・生物哲学

哲学特殊講義が独仏英伊西露米の各国哲学

なお付随的な哲学語学が希羅伊西露語　そして卒業論文

月から金までいや日曜八時四十分から午後四時二十分までの四コマ

だが先生が誰もいない　テキストと副読本だけが数多積まれ

四年間、いや万年留年生は生涯学んでも成績票はいたって簡単

一般基礎科目は成績票に表記されず専門科目のみ　しかも

概論　哲学　西洋哲学　東洋哲学　演習　購読　現代哲学

人間哲学　社会哲学　科学哲学　哲学講義　特殊講義　だけ

評価は可でも不可でもなくすべて「無」　何単位取得できたらう

そうそう　卒業論文は「無」についてだが　未完

喜び悲しみ怒りながら愛と智を土台に真善美を求め続ける

だが人生は振る棒にもならず　在るは星・雲・雨・石・草・虫・心

自室と我

凡人が文芸に想いを馳せたばかりに

いま人生そのものを凡人らしく失敗だったと

大都会の頻繁な講演や展覧会そしてコンサート

拌みに行けなかった悔恨が幾つも積み重なる

そう 並みの被雇用者には金と暇は無縁

想いの濡れ羽色も乾き深黒に沈んでいく

知ることは高遠な喜悦だと思ってきたが

世界あちこちの文学碑や美術館そしてホール

パラグライダーで降り丸木舟で下り

珊瑚礁に潜ることが遥か夢であったように

一度もどこにも行けなかった非旅人

知ることは苦痛であることをいま初めて知る

そう 凡人にとつてもともと 歴史に

忘れられたのではない初めから埋もれた人たちの

見えぬ足跡を追慕することだった
せめて彼らの心を追体験することだった

上を翹望^{ぎょうぼう}し足元を穿りながら傍らに無頓着だった
食卓に着き茶卓に肘突きながら何も見ていなかった
傍らの向こうに埋もれた人々の行列と群れの幻視
滝のように降る雨が屋根を叩く悔恨の音

その後のしとしと降る悲哀の音

まもなく迎える初期高齢者としての引き籠り生活
そう 諦念と憧憬の家庭内隠遁生活へ

彷徨

アジア・アフリカ 何度目の巡遊だろう
ふだん西欧精神文化が中心であるだけに
イスラム哲学とアラビア詩から始まった
バラモン学とヒンディー文学を経て
儒家思想と六朝・宋の詩人たち、水墨画
東漸し日本に戻ってきた
朝廷思想と五山文学の理解を少し深め
また旅立った

まずは初めて朝鮮を訪れる

その哲学思想、漢詩と水墨画に驚いた
ぐっと南下して東南アジアに

無知なためまず各民族の歴史書に学ぶ

シヴァ神 大乘・上座仏教、儒学とスーフイズム

思想の坩堝と民族の文学に混迷し留まったまま

まだここで詩人哲学者と出会っていない

強いてハムザーとリサールか

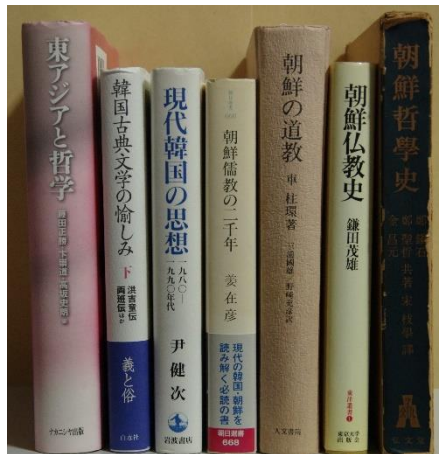
深めたのはアジア人の心はみな同じということ

南、西アジアの諸国と西漸し

未読の本棚のアフリカの南端までのつもりが

一年がかりでまだ東南アジアに留まったまま

あと一年で還暦に死すというのに



『韓国近代哲学の成立と展開』『人物でみる
韓国哲学の系譜』『朝鮮文学史』はどこに

放射と照射

有られて有る存在として両義的に
数多の存在に驚き、それらを識り
愛が生じ、悦び、共振しながら
有らしめるものを認識しようと
反省を繰り返しながら探究し続ける

照射

光 — 存在と認識 — 地水火風十心

星 ∷ 月 — 惑星 — 太陽 — 銀河 — 宇宙

雲 ∷ 風 — 雲 — 雨 — 雪 — 大気

石 ∷ 鉱物 — 岩 — 山 — 地層 — 地球

花 ∷ 草 — 木 — 蘭 — 高山植物 — 森

虫 ∷ 昆虫 — 蝶

鳥… 小動物 — 鳥

心… 感覚 — 感情 — 意志 — 精神

放射

遠く宇宙から万遍なく降り注ぐ

天地創造以来 宇宙開闢の光が

人類誕生後も 山々と岩に降り注ぐ

風に潜み雨と雪に混じり大地に森に

溪流とともに流れ湖面と海の波に反射する

飛翔する鳥類の眼に入り昆虫の脚に注ぐ

草原を揺らし花を咲かせ種子に宿り

そう 最後に石の中に生きる

石はここらの母胎だった

即興詩 1

ツバメが飛来した

煙突に営巣し

やがて 押入れで暖をとった

いつしか妻のお腹にいて

長男が生まれた

庭でスズメと遊んでいた子が

ツバメに誘われ

進学のため遠い街へ巣立った

やがて カモメに誘われ

自分の子を連れ海を渡った

数年前まで

見知らぬ黒人が居座っていた
国際化の波にすべて浚われ
いま この家に誰もいない

即興詩2

偏在からの放却

家の裏は野菜畑と林檎畑

猫 犬 鶏 兎 豚 山羊 馬

すぐ田圃が周囲を囲い そして遠くまで
四世代家族が賑やかに茅葺屋根の下

家の横に野菜畑だけ

一時的な鴨の親子も 映像と消え

田圃だけはそのままだ

三世代家族が家鳩とともに穏やかに

田圃が潰れてバイパスが通り

さらに潰れてすぐ郊外大店舗の駐車場

狭まった畑もついに何台目かの自家用車置き場

核家族がもの静かに

店舗が去ったコンクリート原に

割れ目から雑草が寂しく風に揺れ

迂回した三車線道路のためバイパスにも草

老夫婦の家はひっそりと

帰ったときにはもう誰もいない

短詩五題

石の輪廻

かつて海底にあつた山塊
突き出た岩がやがて脆く割れ
少しずつ少しずつ風に押され
少しずつ少しずつ川に流され
やがて海底に戻るのだらう

生靈

風を走り

雨を泳ぎ

雪を舞う

生靈よ

そして

石に抱き

火に包む

生靈よ

雨

少年のとき

その時は萱屋根だが

戸が開けっ放しの縁側で

じっと雨音を聞くのが好きだった

以来 春も夏も秋も

雨が降ると

和室で片肘をつき横になり

屋根の雨音を聞きながら

じっと外を見ているのが好きだ

そして 本を読みたくなる

夏山の

細雨はじく花

すがすがし

風

風が揺れ

部屋に紛れ込んでくると

絵を描きたくなる

絵が描けないから

風に誘われてか

野山を散歩したくなる

山々の風景に魅せられ

風に引かれ高山に登り

小さな花が少し揺れるのを知る

そして鳥瞰し

部屋を懐かしむ

星雲

高嶺の深く透き通った空

雲海と雪原

深い森と昆虫、高山植物たち

万華鏡の世界を鳥たちが飛ぶ

こんなに鮮やかなのに

あんなに鮮やかなのに

頭の中にだけいろいろ咲き乱れ

夜空に何も見えない

花や虫がもたらす色彩や動きより

はるかさまさまに 底光りし輝き

壮大なあるべき模様

アンドロメダどころか

六連星さえ人口の雲に覆われ

世界の夜

諦めて

詩が書けないから

京都にある私立大学の土曜日の午後

勤務が終えた後の職務中を抜け出て図書館前

雨の中 校歌が刻まれた寺山修司の歌碑をじっと見る

業務上何度も歌っている詩を黙読する

今年の修司忌に県詩人連盟会長が来場したという

後で手紙で知ったのだが職分を抜け出てもご挨拶しなかった

昨年は没後二十五年忌で学内で学会も同時に開催されたが

寺山修司は私にあまりにも無縁だった

図書館職員に採用ということで塾講師を蹴って来たのだが

多忙な教務課で万年兼受付兼清掃夫

二十数年馬齢のみ重ね井の蛙であり過ぎた

詩が書けないから

古都にある国立大学の日曜日の早朝

文化財である旧制高校時代に利用された外国人教師館の前
雨の中 太宰治の文学碑をじっと見る

「私には、また別の専門科目があるのだ。

世人は假りにその科目を愛とよんでゐる。」(『津軽』)

傍らに図書館から発見されたばかりの高校入学時の写真

大学創立六十周年そして太宰生誕百年

妻が図書館勤務で長男が数学科の学生で二男が新制高校生

お陰で迂生も太宰について街の新聞にエッセイを

街のペンクラブに小文を書くことができたが

だが太宰はあまりにも秀才過ぎあまりにも遠過ぎた

雨の中 賞与なくローンの終らぬ六畳のミニハウスへ行く

積み重なった七個の段ボール箱をじっと見る

謹呈し損ね残った自費の詩集と短編集 随筆集は無理か

凡人とはこんなものだろう まもなく五十七歳も終る

(この時、両文学碑を撮っているのだが)

雲上の人びと

半島のように突き出た雲に飛び付いた

西の人たちと東の人たちが論争している

理法が先か物質が先かと

勝った方が南北に分かれ更に大小に分裂

負けた方は老いた人たちと年少に分かれ

みな自派以外は敵とばかり論争果てしなく

一方 隅の方で雲の壁にずっと対峙し

端座して何やらぶつぶつ唱える者がいる

外では小舟で頬杖をつき横臥しながら

空っぽの杯を手にし更に上の雲を眺めている

みんなその雲に気づいていない

半島に連なる広大な大陸のような雲海を進む

存在として宇宙と心は一つだが

現象と天性をどう説明するか

宇宙から論ずるか心だけで論ずるか
そこでもいつものように折中派もいる
雲中で多種多様な思考が議論し合うなか
隅っこで黙って座り続ける者がいる
ひとり雲の竹林に側臥し空を眺めている
誰もずっと上の雲の空を知らない

広大な雲海に遠く入道雲

その仙山の向こうは輝くガンダーラらしい
もうアルカディアも近い

振り向くと自分が発った島も小雲だった

白蟻が忙しなく奔めいてばかりで意見さえない
でも どこかで誰かが立ったまま束の間
目を瞑りじつと見上げているかもしれない

色子

存在 それは宇宙のようなものだけに言うのか

それとも 一瞬のうちに生成消滅する素粒子一個一個のことか
実在らしくないものが存在の鍵を握る

愁遠と瞬間 その差異が漸次時間を生み出しているのだろう
時間こそ 空間と同じほどに実在するもの

空集合は存在のない非在 集合こそ実在するものか

だから複数か 存在と もうひとつの或る存在

その間が空虚であろうと 相互作用が起こるのだろう
だから 存在 なのだ

影響されることでさえ 影響を受けさせているのだ
作用が空虚にゆらぎをもたらす

それは またしても超素粒子によってか 永遠なるアトム
最初から宇宙は質料に満ちていた と無知な者は逃げ込む

質料は時間とともに周期的な運動をしていた
スピンしながら 高速から不規則な緩漫へ 円から歪な楕円に
衝突の頻度と運動量を弱め 高密度から散漫に広がっていく
それらの差異が様々なゆらぎを生み出していく
ゆらぎがひとつの様態として様々な色となって発現するのか

色は宇宙に遍く波及し 遙か遠い いや極小のこの地上にも
紺青の空 光満ち溢れる海原 地平線かなたの夕日
そして緑深い山 その影 風がバリエーションを綾なす

私自身は塵同然のちっぼけな生きものだが
不思議だ 眼という器官は宇宙からの神秘的な賜りもの
偶然性を秘めた必然的な進化は驚異的であり
せめて 純粹な色彩のための絵を描いてみたい
眼がゆらぎすぎ 宇宙に溶けてしまう前に

位相空間——葛西克雄絵画展より——

野面の庭石がいくつもころがっては立つ

池から芝生から石というよりは苔むした岩

組石はなく 仙人か禅僧かきまざまなかたち

築山の滝もいつしか幽玄な自然の滝となって膨れ

池は小川と化しては淀んで沼となる

休耕田の多い田圃に囲まれた消え行く寒村

村はずれに残された石の道標

そこもかつて日本庭園だったのかもしれない

伐採された古木の太い幹のように崩れ

年輪のようにむきだした層理は破壊の美と沈黙

もはや時を刻んだ過去のしるべ

空間に一個の岩石が静止している

あの石の道標のひとつのかげらか

それとも 庭石のひとつが移動してきたのか
地球はもうなくなつたのかもしれない
地上にあつた以上に現実的に

やがて 五個七個と飛石のように宙に並び

どれも層理は色とりどりの模様
それが見事な全体のバランスを保つ

そして いつのまにか周囲に岩石がいくつも浮遊し
一斉に宇宙のどこかに向かつて動き出す

夏日に 焼けつく肩に痛みを覚えながら

川原で手に握りしめていた綺麗な小石

深い川底に潜って見つけたあの小石

どこかの庭石の破片だったのか

透かすと縁が青く光っていた

そんな麦藁帽子の想い出から

ぶつかり熔けあつていつしか岩石となり

いま宇宙のどこかを浮遊しているのだろうか



夢―腐れ卵

大都会の早朝の公園 晴れ

広い空間に幾つもの西洋建築が散在する
夜行バスで訪れた寝不足のためか

どこかよその国にでもいるようだ

でも 空の透けたところだけは故郷のもの

まだベンチで横になっている浮浪者たち

吸殻の清掃人 犬の散歩者 ジョギングたち

犬に必ず首輪を付けるよう

朝早くから甲高い注意の放送が流れる

ひとりの婦人が慌てて子犬を抱きかかえた

ラジオ体操や少林寺拳法などあちこちの群れ

沖縄の民謡とその三味線の稽古が郷愁を誘う

音楽ホールの傍らにヨーガをする白人女性

まだ開いていない売店の前にジーパンの黒人



お定まりなのだろう初夏の公園情景に
国際化という人種の坩堝の臭いが漂う

動物園や二つの美術館の前に観客の列ができ
午前中に憧れのロシア絵画展を

午後には不勉強なマネリスムの絵画展をと
二年前のラ・トゥール展を訪れて以来だ

いま 少し倦怠を感じながらも徐々に興奮し
夕方 帰りの列車に乗り込むときには

満足感と寂寥感を覚えるのだろうか

憧れの山を下し振り返ったときのように

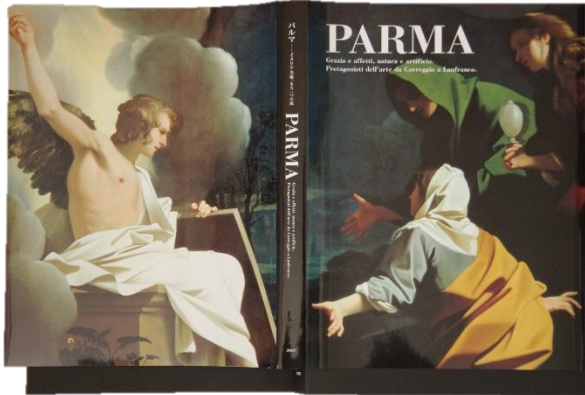
少年のとき 手作りの双六で世界一周を

青年のとき 地図で世界の山々の遠望を夢見

壮年になって せめて世界の美術館巡りをと

だが 一度も海外を訪れたことがない

初老を前に 百名山と全国の美術館さえ諦め
風景とは何か 夢は孵化しないまま腐れゆく



館の絵

アンブロジーアーナや

ウンブリアからアカデミアへ

ウフィツィのマルケが

ボルゲーゼで

ブレラよりカツラーラに

ピッティをコッレルと

カポディモンテ

グルベンキアンなどカタルーニャまで

ソアーレス・ドス・レイスばかり

ティツセンIIボルネミッサだけ

ソフィアほどプラドなり

セラルボぐらいジローナやら

マウリツツハイスはワロン



クレラー・ミュージアムもボイマンズ
メスダッハでもイクセルしか
ブレディウスこそボネファンテンか

マルモツタンかオーギュスタン
オルセーゾルーブル
グラネなカルナヴァレ
ファーブルともコンデ
オランジェリーよウンターリンデン

（補記…日本で開催された欧米の美術館展の図録を未訪でもできるだけ入手。講談社の〈週刊世界の美術館〉全10巻や美術出版社〈世界・美術の旅ガイド〉も入手。さらには〈地球の歩き方〉各国の中の美術館も探り美術館巡りである。そこには絵画史と写実派の新たな発見の喜びも含まれていた。そして、西欧美術館のファイル8個作りHP「シエカの風にアップ。懐かしい。次にロシア、そしてアメリカに移る予定ではあったが、よくもまあ調べ図録等の一部をスキャンしてテキスト化したものである。出発点はドイツのアカデミックな写実画を知りたく。そして詩でちよつと表そうとした。まずは伊西仏あたりからと。 2026. 2. 15）

無音

林間に冷やかな陽射し 紅葉の日没は静かだ
巨人の指揮棒のもと 時空の休止
やがて焼けた雲が迫りどこからか暁の序奏

シンフォニア サンフォニー 何に向けての序曲か

悲劇へ 喜劇へ 人生の曖昧な暗示

世俗の陽気な急と 気高くもメランコリーな緩

メヌエット調にどこか悲しげにホモフォニーが奏でる

生の喜びを覚えては愛に鬱陶しく死に不安となり

ついに管弦楽が咆哮し シンフォニー

内なる深遠な宇宙へ放散あるいは逃避するのだ

前古典派から環境音楽まで数多のシンフォニーを聴き

無数のシンフォニーが様式を超え不協和に交雑しては共鳴する

脳からはみ出て それでもなおそれらを総合したひとつの

凡夫は頭の中で 壮大なメタ・シンフォニーを響かせる

音響のスペクトルを思考し超ミニマルな微音を夢想し
倍音を加算し二声多声へとフーガを絡ませる
コスモスという対位法に感応するハルモニア
新たなマニエリスムへの後退に過ぎなくとも
ポリフォニックな束がひとつの旋律となつて
宇宙の鼓動に乗り 果てまで流暢に透き通る
メタ・シンフォニー

巨大なメタ絵画であつた昼の裏で

夜は、創造の源泉でもあろうメタ・シンフォニー

内奥のホワイトホールから次々と序奏が湧き上かつてくる

私は一個の楽器 私は巨大な交響体へと膨らみ

CDプレイヤーが止まった眠りの中で永遠に鳴り響く

ああ 虫の音は年々減っている

異空間の輝き

夜に白く浮く尖塔のあるロマネスク建物

室内の明りに鮮やかな縦列のステンドグラス

ひとりの人間の生涯が　もしかしたら

人類の生命の輪廻が描かれているのかもしれない

天に聳え立つようなゴシック祭壇

その下方　右側に聖母の　左側に職人の立像

聖母に抱かれた嬰児は　いまにも運命に囚われ

祭壇に上下に並ぶ聖人たちに見送られながら

すでに舞い降りていた天使とともに　昇天し

遠く迂回し　やがてステンドグラスの絵の中に

小管弦楽と箱オルガンとの　外は十二月中旬

軽快なバロックのリズムと流暢な古典派の旋律

時にコーラスも響き合い　街の音楽家たち

生きる喜びと偉大な音楽家たちの祈りを奏でる

質素な長椅子で人々は耳を傍立て

音楽家たちの教えにじっと頷くように

あるいはミュージズに懺悔でもするかのように

背後の壁に観音のような聖母画

神秘にだけ関心を持つ無信仰者も束の間の安堵

屋内に楽の音が靈妙に残響し合う

聖母は 一つの時代どこにあっても

それぞれの街や村で生活する普通の母だった

だからだろう 凡夫でも内観にこだまする

そこに神秘への昇天の入口があるかもしれない

街のカトリック教会での

街のバッハ・アンサンブルにより

疎音の出会い

石段の上に仁王門もある密教は真言宗の古刹

高校生のとき 昼休みに級友と境内の草原に座り

弁当を食べながら五重塔を見下ろし見上げていた

東京の外語大でロシア文学をやり彼はいまだここに

この前初めて同窓会に出たが 彼はいなかった

いつも本堂の下で鈴を鳴らし合掌だけで終わる

二人でそして家族で 初詣 宵宮 七五三 合格祈願

卯年生まれの私の一代様

境内には多くの堂宇が散在している

護摩堂 如意輪観音の六角堂 五智如来堂

文殊堂や聖徳太子堂 庚申堂や薬師堂

何年経ても いまだどれもよく知らない

鐘楼のゴーンという音で始まった

山伏の法螺貝が続き銅鑼が鳴る

本堂の階段から僧侶たちの足高の下駄と錫杖の音

空海が右に座す大日如来の前で声明が始まる

本坊の渡り廊下から弦楽奏者たちが静かに入ってくる

バッハのゴールドベルク変奏曲の三重奏が始まる

小宮廷で演奏しているような錯覚

天井から釣り下がった大きな照明には

笛や太鼓の羽衣の天女たちが浮遊している図絵

東京の交響楽団の首席女流ピオラ奏者は

ときどきこうして街に戻ってくる

東洋と西欧 田舎と都会の交感

三禮 アリア 如来唄 カノン 四智梵語

幼い胸に潜む街の民謡や三味線を余所に

フーガ 鳴り物 トリオソナタ 般若心経

外では 五重塔がもう一層伸びたような気がした

（「バッハと声明の出会い」最勝院大円寺）

追憶と俺

時のふくらみ

ふいに あの時間が見たくなって走り出した
どこだったろう ずっと南の方だったろうか
桜がもつと色濃くコマの色が鮮やかだった頃
ころころたくさん路面を転がっていた
それでいて 夢のように大きな一つのもの

沼底の泥に埋もれていたその時間を
受精卵のようにぶくぶく浮上させ

川面のきらきらした照り返しにもどす

風がそのきらめきをすくい

はるか迂回して ぼくの喉に吹き込んでくる

一呼吸するたびに 味 香り 触感がよみがえり
五感が一斉にびくつとする

視聴覚だけで縮こまっていた体内の時間が

縦波に伸縮してはふくよかになり

すべての時間に呼応して見え出してくる

赤外線のもよほの温かみに包まれて

幼心地と少年の無垢 そして青春の想いが重なり

それらは凹面鏡で濃縮され その裏側で自由に飛び交う

丸く膨らんだ時間に呑み込まれ

虹色を放つシャボン玉になって飛んだ

が それも束の間

まるで体内の静電気が飽和になったかのように

痛くもなくバンツと脳内が破裂する

これからのとき

あのととき

歴史が動いたことなど露も知らなかった

ただ 兆しというものがあることだけを覚え

丘の急斜面で草にすがり通過する列車を見下ろし
遠くの汽笛に先祖の遠吠えを聞き動悸していた

そのとき

自分の運命が傾いたことなど露も知らなかった

ただ 印というものがあることだけを覚え

泥底の水中で懸命に体をねじらせ対象を探しては
それが思索の奥の抽象であることに驚愕した

このとき

知るといふことを初めて知った

自分は何も知らないといふことを

来たりては去る兆し 最初から見えざる印
自らを不動の金縛りに結わえつける

それから

書冊の中の苦しみ人のすすり泣きに震え
無知に幾度も幸福に至るべき知恵の樹を植え始めた
枝葉を延ばし出来事を積み重ねたつもりが
それらは次々と消えゆく運命の仮象に過ぎなかった

あれから

どれほど経たのだろう小さな世界ばかりに生きて
長かったのか短かったのか五十年は一日のごとく
歴史はどうに一介の人生を呑み込み

竹帛に垂れる何もなく無歴史へと解消していく

隧道

本正月よりまだ旧正月を尊んでいたような気がする

元服は露知らず 成人の日に肖ってか

小正月に青年よろしくかまくらをつくった

女正月らしく童女たちを招く

水神の祭壇はないが雪棚に親が何かの御札を置いておく

色鮮やかな乾餅を食べ 双六や花札で遊び

ロウソクの炎に揺られ やがてとうとうと眠りに陥る

火祭りの名残りなど誰も知らない

うたた寝から目覚めると

とうに炎は消え雪壁に穴が開いている

誘われ所以なくそこに入っていく

長かったような すぐ扉の裏だったような

その穴は人口の洞窟に通じていた

かつて大仏のあった小さな城山の

城主たちの逃道でもあったというその洞穴

悪童っぽく懐中電灯を照らし何度も探検した迷路

水滴や進路を塞ぐ地下水に蝙蝠　そして自分たちの木霊

その頃はもう少年を脱皮しようとしていた

長いトンネルのようだった試練のほの暗い思春期

集団生活に中世の桎梏かのように身動きできず

狭い視野が殊更に独房意識を強いそのままずっと労働者

闇の中あちこち西欧中世の古城巡りを夢想し

自室で目を閉じその調べに聴き入ってばかりのとき

すーっとトンネルの中を進んでいるような気がしてくる

いつまでも出口が見えてこない暗闇

そして　自分の脳が空っぽで　食道や臓器など

体が空洞ばかりで成り立っていることに気づく

さらに　地球が巨大な閉じた洞穴であり

宇宙そのものが無限大のトンネルであることに

四態

しんしんと降る中 西の方から

雪煙の杜を背に 遠く朦朧と

蓑に菅笠の老人が雪道をとぼとぼ歩いて来る

束の間 遠い追憶に慇懃され

我に返ると それは老人ではなかった

北の森に もうすでに身近に

吹雪に見え隠れしながら勇猛に藪をこぐ

働き盛りの精悍な男だった

毛皮を羽織り大きな藁沓で闊歩してくる

その威圧感に目を側め

やっとの思いで背を向けると

林の中 目睫にその男が立っていた

だが少年だった しかも見覚えのある

ふわふわと舞う雪間に一瞬青空が透けた

すべては幻影　と自らに思い込ませ

東を向き　とぼとぼ雪の原を歩き出す

朝日に向かつてか　それとも春を求めてか
いや　たぶん無目的に

いつしか幼子を背負っていた

振り向かなくとも顔は知っている

そう　幼い自分だ

そう気づくと肩の荷が下り

帳が下りる中　また独りとぼとぼ歩み続ける

たぶん東の向こうは西になるのだろう

向こう側で誰かが見ているような気がする

老人が一人とぼとぼ歩いて来るのを

小さな流離

財布や連袂れんべいなどなくとも

アーケード街をぶらついた

平日の雀色時に

たんまりと日曜の午後に

ズボンの後ポケットに通学定期

川沿いの終着駅で電車を降り

沿道の人込みに上擦りながら

学生時代の土手ぶら

ズボンのポケットに小銭はある

時に憧れの書肆で文庫本を買い

七歩しちほのさい才もないのに古本詩集を買い

珈琲一杯で長座するのは

横道の名曲喫茶か小路のジャズ喫茶

書店で同じ哲学教室の彼に値遇しちぐう

珈琲を啜りながら清談し私論し合った
一緒に駅に戻ると偶然彼の恋人がいた
友達と一緒に名画を観た帰りだという
その友達という女学生の横顔に驚いた

翔けぬ比翼の鳥か伸びぬ連理の枝か
本卦がえりを前にして方や五十路半ば
符合 いま貸店舗が並び淋しいだけに
老舗に感謝と敬恭の念が込み上がる
またしげしげ珈琲を飲みに行こう

黒ずむ茜

昔よく 広く平坦な乾田から

土手下のりんご畑から

野良仕事の手伝いで快い疲れを覚え

その日最後のひと仕事リヤカー引き

夕餉の曲がりくねったでこぼこ農道

岩木山の広大な夕焼けのなか

今いつも 点灯し前車に続く長い帰宅

視界零に自主的な走行ではなく意界も零

電車の個室のようなレール上の感覚

ラジオの音楽は時々騒音に消え聴界零

時に湧く詩想もすぐ忘却し想界零

ただ腹がへり無機的に喫煙ばかり

職場の部屋そして自室

やがて個室人生を終え黄泉への旅仕度

初出概要

当詩集は、二〇〇六年から二〇一〇年までの五年間に発表した六十編による。藤森里美主宰の詩誌『ゆすりか』に三十編ほど、加藤忠昌主宰の詩誌「風」に十編、青森県詩人連盟刊行の『青森県詩集』と『岬』に七編と、同人として所属しているところが主な発表の場である。他に日本詩人クラブ刊行の『日本現代詩選』、芳賀清一編集発行の『Merros』や街の新聞に掲載されたものも含む。

なお、二〇〇六年からの年度別発表（一部作成年を含む）詩数は凡そ十、十六、十三、十、十一となっている。詩集としての詩の配列順序は、発表順を基準にしながら見出しをつけて内容が類似したものを一応まとめている。そして見出しから詩集のタイトルを得た。

最初に上げている習作「馬」は、二〇〇六年秋号の『ゆすりか』70号から二〇〇八年秋号までに載せた五編。二〇〇八年の晩秋だったか初冬だったかに、かつて弘前詩人等で活躍された宮越妙子氏が来弘ということで、芳賀氏が喫茶「うくの」で同士を集めて歓迎朗読会を開催した際に、小冊子にして配布し朗読したものである。

表紙および裏表紙の写真は、二〇〇八年の谷川岳家族登山の時のもの。

二〇〇六年は今からちょうど二十年前である。二〇〇〇年代の後半は、一九五一年生まれの小生の五十代の後半に当たる。卒たちは部活や勉強が中心となり、小生の方で野山行きは控えるようになっていた。家族で県外の山へ行ったのは二〇〇八年の谷川岳ぐらいである。当時の小生は県都にある私立大学教務課事務員で大学院担当であり、大学院は自然環境教育学専攻を含む環境科学研究科であったため、有難いことに事務員ながら相変わらず野外実習にもしばしば参加でき、院生と一緒に学ぶことができた。十和田山の麓で十和田湖畔にある学園所属の花鳥溪谷を始め、酸ヶ湯温泉の下方にある林の中の学園ヒュッテ、南八甲田の黄瀬沼への分岐でのテント張り、白神山の二ツ森展望台などが特に記憶が深い。この時期までまだ山について書いた詩はほとんどない。山はエッセイや短編で書くべきものと思っていた。

自然観察等に関し以上の関りがあつたから救われていたものの、やはり冬など自宅から県都への往復は、時間をもつたいないようで歳と共に少しずつ精神的に辛くなってきてはいた。以下に詩誌「ゆすりか」80号に掲載したミニ・エッセイを上げて置く。

「出勤時間は八時十分だが、その二〜三十分前には担当する幾つかの施設の機械警備を解除し清掃や除雪をし出す。勤務時間は午後六時まで。五時半から清掃に入るが、六時は過ぎてしまふ。そして実際に出勤するのは七時前後。

長距離通勤者は六時二十分には家を出る。着替えだけで顔は洗わない。おにぎりを掴んで途上缶コーヒーと煙草を買う。帰宅するのは夜八時半過ぎ。新聞に目を通しながら夕食を済ます。時間の節約のため入浴は極力避ける。眠気を誘う飲酒も避ける。可能な限り少しでも早く趣味の時間に入り出す。そう、一日最低二時間は趣味の時間に費やすという哲則―人生上の哲学的則と称している―を墨守るために。

だが、冬季は趣味の時間を一時間でもつくるのが難しい日が度々ある。悪天候によるさらなる早朝出勤と帰宅の遅さがその主な原因となる。出勤前に車に降り積もった雪を払い、時に除雪車が置いていった雪塊を排除しなければならない。吹雪の日は帰りだけで二時間を要することもある。そんな時は時間のなさに泣きたくなることもある。でも何とか少しでも多く趣味の時間を設けようと。だが、二時間は難しい。結果的に、趣味の世界のまとめ作業もそうだが、でき上がる自分自身の作品は極めて少なくなる。しかしそれは、何はさておき己自身の能力の問題であろう。そこに、物理的時間のなさ以上に深い悲哀感が生じてくる。でも、だからこそ、凡夫はただ頑張るしかない。」

そのような日々であったが、やはり職場の教員や学生からの影響も大きく、なんとか頑張る気力は維持できたようだ。五十二ページにある「近況」(「ゆすりか」70号に掲載)がその証左のひとつかもしれない。

瀬川紀雄

一九五一年 青森県平川市生まれ

弘前高校（三年次早々文学を趣味に）、弘前大学人文学部文学科卒

ホームページ「シエカの風」（1997～）、Facebook & blog（2012～）

詩集『石ころの詩』（水星社、2001）

写真詩集『命たちの輝き』（KDP 出版、2025）『風景に命と人』（KDP 出版、2026）

ウェブ詩集『さようなら命たち』『儂くも生の尊厳』『野山と海辺』

『高嶺と湿原』『池畔と川辺』『自然と芸術』

ネット詩集『自省から逍遙へ』『儂くも一日一詩』『若き日の探求』

短編集『道端に風光り』（路上社、2002）ウェブ短編集『春の蝶と花鳥』

詩誌「ゆすりか」元同人（2001～2019）

詩誌「風」（同人 2002～、編集 2010～、発行 2017～）

自作詩朗読の夕べ「麗日の会」会員（2014～）

文芸誌「無名群」同人（2016～）

俳句・短歌各グループに所属（2017～）俳句誌「千青」に時々執筆（2019～）

青森県詩人連盟（2001～、2018 理事・事務局長～2023）

日本詩人クラブ会員（2002～）弘前ペンクラブ会員（2008～、現在常任理事）

弘前大学哲学懇話会会員（2016～）



風
詩
社